

NFRJ からみた父親の育児参加の変容

松田 茂樹
(第一生命経済研究所)

【要旨】

NFRJ98、03、08 の3つのデータを用いて、未就学児をもつ世帯における父親の育児参加の頻度及びその規程要因の変化を分析した結果、次の知見がえられた。

第一に、イクメンが話題になっているものの、近年、父親が子どもの世話をする頻度と子どもと遊ぶ頻度のいずれも増えてはならず、むしろ減った可能性すらある。

第二に、父親の育児参加が増えない理由として、父親の労働時間（通勤時間を含む）が依然として長いことがあげられる。父親の労働時間は、NFRJ98において10.8時間であったが、NFRJ03では11.6時間へと増加している。リーマンショック後もほとんど短くなっていない。従来から長時間労働であることがわが国の父親の育児参加の阻害要因になっていることは指摘されてきたが、今日においてもその様子にほとんど変化はない。

第三に、父親の育児参加が増えない理由として、近年ほど父親の性別役割分業意識と育児参加の関連が明瞭になってきていることがある。性別役割分業意識は、NFRJ98からNFRJ03にかけて一旦弱まったが、NFRJ08では10年前と同水準まで戻っている。性別役割分業意識からみても、父親の育児参加が増えることにつながっていない。

キーワード： 父親、育児、労働時間、性別役割分業

1. 問題設定

本稿では、NFRJ98、03、08 の3つのデータを用いて、未就学児をもつ世帯における父親の育児参加の頻度及びその規程要因の変化を分析する。

本稿では、まず、父親の育児参加の時系列変化を明らかにする。わが国は夫婦の性別役割分業が強い国で、従来から父親の育児参加の水準は低い。2000年前後における未就学児をもつ父親の育児時間を比較した松田（2005）によると、欧米の男性の1日あたりの育児時間の平均が0.9時間であるのに対して、日本は0.4時間と半分以下であった。女性の社会進出がすすむ中、わが国の父親についても同様の変化がみられるか否かという点は注目される。

現在、厚生労働省は、男性の育児参加促進のための啓発活動として、「イクメン・プロジェクト」を実施している。果たして、父親の育児参加は近年増えているであろうか。

また、わが国の父親の育児参加を規定する要因及び近年におけるその変化を分析する。既存研究ではわが国の父親の育児参加の規定要因として、主として行うべき家事・育児の量仮説、時間的余裕仮説、相対的資源仮説、性別役割分業意識（ジェンダー・イデオロギ

一) 仮説が提示され、分析がなされてきた (Nishioka 1998; 稲葉 1998; 松田 2002, 2004; 永井 2004; 石井 2009)。本稿では、各仮説を操作化した変数と父親の育児参加の 2 変量の関係を分析して、父親の育児参加の規定要因の現状について基礎的な把握を行う。

2. 理論的背景

父親の育児参加の規定要因についての理論と仮説を提示する。ここでは、時間的余裕仮説と性別役割分業意識仮説をとりあげる。以下、松田 (2006, 2008) をもとに、各仮説の概要を説明する。

時間的余裕仮説では、父親・母親それぞれが育児に費やす時間的余裕があれば、育児を行うことも多くなると想定される。育児を行うための時間的余裕を制約する大きな要因は、労働時間である。1 日は 24 時間という限りがあることから、労働時間が長ければ、その分家事に費やすことができる時間は少なくなるため、育児参加も少なくなる。

性別役割分業意識仮説では、性別役割分業に否定的な考えを持つ夫の方が、性別役割分業に伝統的な考えを持つ夫よりも、育児により参加すると想定される。

3. データ、変数、方法

3.1 データ

使用したデータは、日本家族社会学会全国家族調査委員会が実施した全国家族調査 (NFRJ98、NFRJ03、NFRJ08) の個票データである。このうち 6 歳以下の自分の子どもがいる有配偶 (配偶者同居) の男性で、かつ 60 歳未満の正社員を分析対象にした。1 日の労働時間が 17 時間以上と極端に長い者も対象から除外した。サンプル数は、NFRJ98 が 356 人、NFRJ03 が 298 人、NFRJ08 が 273 人である。

3.2 変数

父親の育児参加度：NFRJ98 では「育児や孫・子どもの世話」を行う頻度を、NFRJ03 と 08 は「子どもの身の回りの世話」と「子どもと遊ぶこと」の頻度を尋ねており、これらの尺度を使用する。6 歳以下の自分の子どもがいる者の場合、NFRJ98 の「育児や孫・子どもの世話」と NFRJ03、08 の「子どもの身の回りの世話を」は同義であると考えられる。以下では、それぞれ「世話」と「遊び」という用語で呼ぶ。1 週間あたりの回数は、「ほぼ毎日 (週 6~7 日)」を 6.5 日、「1 週間に 4~5 回」を 4.5 回、「1 週間に 2~3 回」を 2.5 回、「週に 1 回くらい」を 1 回、「ほとんど行なわない」を 0 回として平均回数を算出した。

時間的余裕：父親の時間的余裕を表す変数としては、1 日の労働時間 (通勤時間を含む) を用いた。NFRJ98 の質問文は、「現在の労働時間は、1 日あたり何時間くらいですか。働いている日について、残業時間も含めた平均的な労働時間をお答えください。」であるのに

対して、NFRJ03、08 では、この質問文に「お昼休みなどの休憩時間は除いてください。」という文章が追加されている。同じ就労者が、同時点において両調査に回答した場合、NFRJ98 よりも NFRJ03、08 の方が短く回答される可能性がある。

母親の時間的余裕を表す変数としては、就労形態（正社員／パート／無職）を用いた¹。

性別役割分業意識：「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という考え方について「そう思う」から「そう思わない」までの回答にそれぞれ4～1点を与え、得点が高くなるほど性別役割分業意識が高い価値観を表す尺度とした。

4. 分析結果

4.1 育児参加の水準の変化

分析に使用した変数の基本統計量が表1、父親の育児参加の度数分布の推移が図1である。まず、世話の回数をみると、NFRJ98 では2.95回、NFRJ03 では2.36回、NFRJ08 では2.50回である。度数分布をみると、NFRJ98 では、「ほぼ毎日」が26.1%、「1週間に4～5回」が6.9%、「1週間に2～3回」が24.4%、「週に1回くらい」が27.3%、「ほとんど行なわない」が15.2%であった。NFRJ98 よりもそれ以降の調査の方が「ほぼ毎日」が減り、「ほとんど行なわない」が増えている。具体的には、NFRJ03 では、「ほぼ毎日」が16.9%であるのに対して、「ほとんど行なわない」が26.2%である。NFRJ08 では、「ほぼ毎日」が15.9%であるのに対して、「ほとんど行なわない」が19.7%である。NFRJ03 と NFRJ08 についてみると、「ほとんど行なわない」が減少し、「1週間に2～3回」が増えている。

次に、遊びの頻度をみると、NFRJ03 では3.50回であるのに対して、NFRJ08 では3.34回と微減である。度数分布をみると、「ほぼ毎日」がNFRJ03 では29.3%であったものが、NFRJ08 では23.4%へと約6ポイント減少している。代わりに、「1週間に2～3回」がNFRJ03 では29.3%であったが、NFRJ08 では37.7%へと約8ポイント増加している。世話同様、子どもと遊ぶことも週末に行う父親が増えたとみられる。

NFRJ98 では「育児や孫・子どもの世話」のみ、NFRJ03 と08 では「子どもの身の回りの世話を」と「子どもと遊ぶこと」の頻度を尋ねている。このため、世話の時系列変化の解釈の仕方について、2つの立場がありうる。

第一は、NFRJ98 で夫が「子どもの世話」をしていると回答した場合には子どもの「遊び」も含まれて回答されており、NFRJ03 では、「世話」と「遊び」が別項目であるため、「遊び」を除く「世話」の面のみが回答されたと解釈する立場である。この解釈でいけば、NFRJ98 とそれ以降の結果は基本的に比較できないということになるため、育児参加の推移はNFRJ03 と NFRJ08 のみで行うことになる。世話についても遊びについても、参加頻度はNFRJ03 と NFRJ08 の値の間に有意な差はないため、父親の育児参加は変わらないといえる。

¹ 自営業・家族従業者は、長時間自宅外で拘束される正社員よりも時間的余裕があるとみて、「非正規雇用」に含めている。

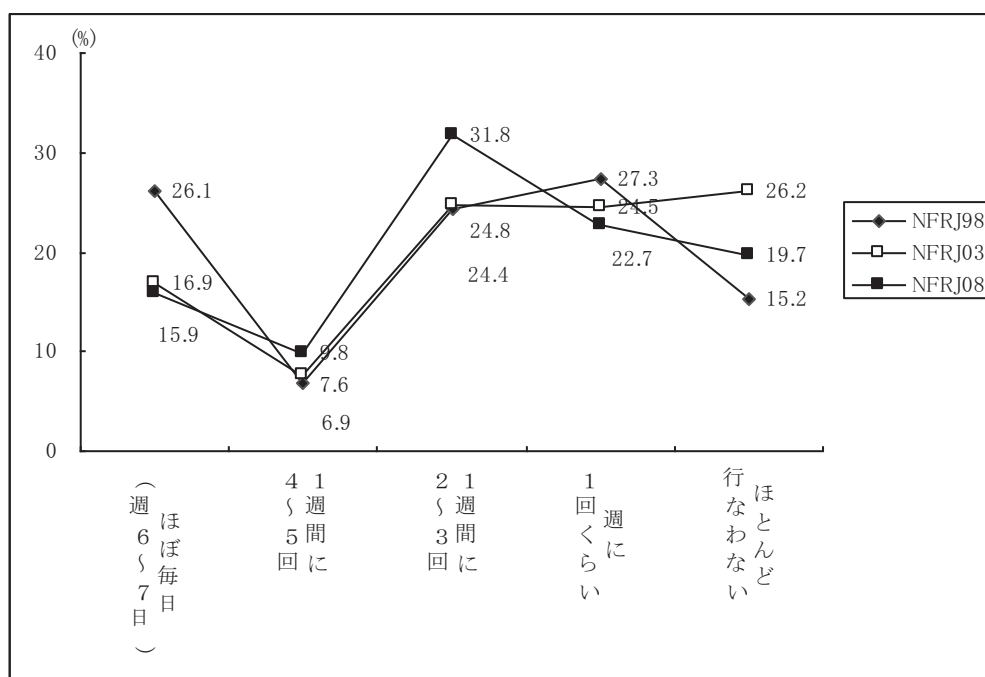
第二は、質問上はNFRJ98もそれ以降も「世話」という表現で尋ねているため、比較可能とみる立場である。この立場で結果をみると、NFRJ98よりもNFRJ03・08の方が世話の頻度が減少したことになる。この解釈が可能か否かは、父親の世話の頻度を規定する説明変数の変化との整合性をみてから考察する。

表1 分析に使用した変数の基本統計量

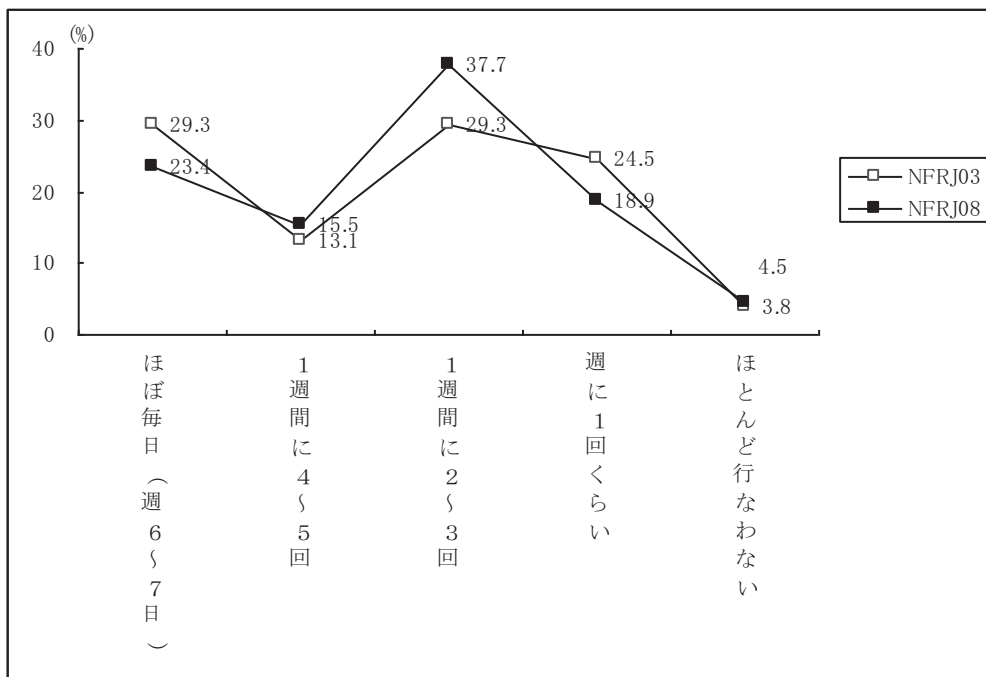
	NFRJ98		NFRJ03		NFRJ08	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
父・育児参加度（世話）	2.95	2.45	2.36	2.30	2.50	2.17
父・育児参加度（遊び）	-	-	3.50	2.26	3.34	2.09
祖母同居	.25	-	.15	-	.18	-
父・労働時間	10.82	2.00	11.61	2.01	11.33	1.97
母・無職	.65	-	.65	-	.59	-
非正規雇用者	.17	-	.19	-	.25	-
正規雇用者	.18	-	.16	-	.17	-
性別役割分業意識	2.50	1.02	2.29	.93	2.46	.94

+p<.10, *p<.05, **p<.01

図1 父親の育児参加の度数分布の推移
<世話>



<遊び相手>



4.2 各変数の変化

父親の労働時間は、NFRJ98 では 10.8 時間であったが、NFRJ03 では 11.6 時間へと増加している。NFRJ08 においても 11.3 時間であり、NFRJ98 よりも長い。注目されることは、リーマンショック後であるにもかかわらず、NFRJ08 における労働時間の長さは NFRJ03 とほぼ同じである。

母親の就労形態をみると、無職の割合が NFRJ98 の 65% から、NFRJ08 の 59% になっている。正規雇用者の割合も、NFRJ98 の 18% から NFRJ08 の 17% まで、これも変化がない。非正規雇用者の割合のみは、NFRJ98 の 18% から NFRJ08 の 25% まで増加している。過去 10 年間に於いて、母親の就労形態には、無職が減り、非正規雇用者の割合が増加するという変化が起きたといえる。

性別役割分業意識は、NFRJ98 から NFRJ03 にかけて一旦低下した後、NFRJ08 では再び 10 年前の水準に戻っている。

4.3 各規定要因の変数と父親の育児参加の関係

各規定要因の変数と父親の育児参加の 2 変数の関係を分析した結果が図 2 である。

(a) 父親の労働時間

NFRJ98 から 08 までのいずれにおいても、父親の労働時間が長いほど、「世話」や「遊び」を行う頻度が低いという明瞭な関係がみられる。NFRJ08 の具体的な数値をみると、労働時

間が「11 時間未満」の者は世話の頻度が 3.5 回であるが、「13 時間以上」の者は同 1.9 回と少ない。

この結果は、時間的余裕仮説を支持するものである。父親の労働時間の長さ、「世話」及び遊びの頻度の関係は、ほぼ相似形である。

(b)母親の就労形態

母親の就労形態別にみると、無職やパートよりも、正社員の方が、父親の遊び及び世話の頻度が高くなっている。父親の世話の頻度をみると、NFRJ98 では母親が無職の場合には 2.8 回、パートは 2.7 回、正社員は 3.6 回である。NFRJ03、08 においても同様の傾向がみられる。

時間的余裕仮説では、母親が労働に出るなどして時間的余裕がないほど、父親の育児参加は増えると想定された。分析結果は、この仮説を支持する。

父親の世話の頻度の時系列変化をみると、母親が無職の者では、NFRJ98 から NFRJ03 にかけて一旦少なくなったが、その後微増している。母親が正社員の者では、NFRJ98 以降、時系列的に世話の頻度が微減している。

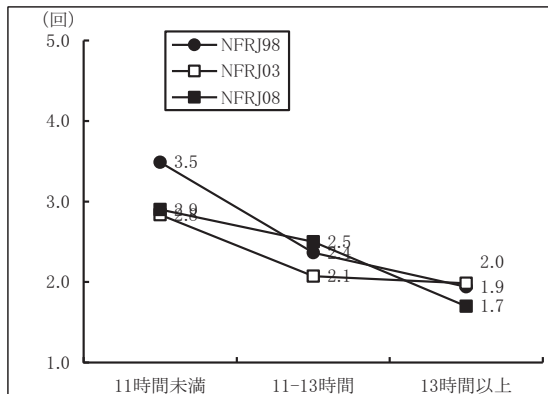
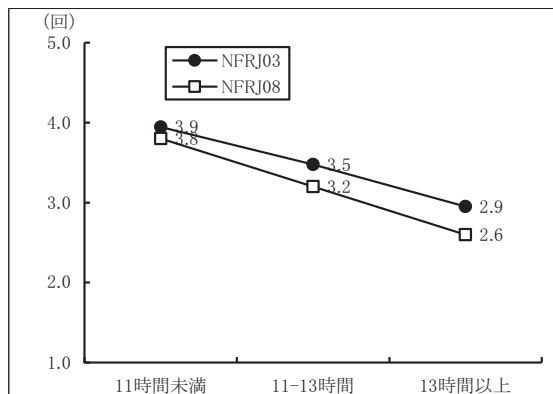
(c)父親の性別役割分業意識

NFRJ98 においては、父親の性別役割分業意識と世話の間に明瞭な関係はみられなかった。NFRJ03 においては、父親の性別役割分業意識と遊びの間に明瞭な関係はないが、性別役割分業意識が弱いほど世話の頻度が高いという関係がみられるようになった。NFRJ08 においては、さらに性別役割分業意識と遊び、世話の有意な関係がみられるようになった。NFRJ08 をみると、性別役割分業意識が最も弱いカテゴリーの父親の世話の頻度は 3.5 回だが、性別役割分業意識が最も強いカテゴリーの者の世話の頻度は 1.7 回である。以上から、性別役割分業意識の仮説は、近年になると支持される方向に変化している。

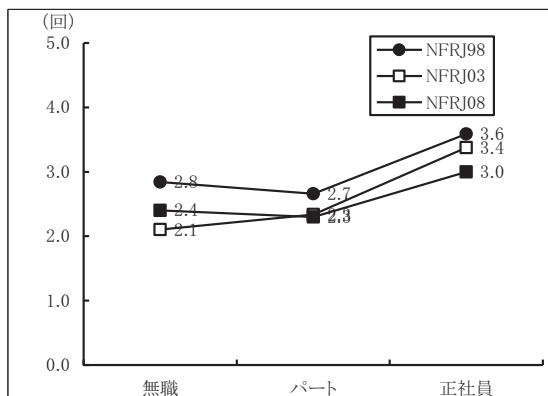
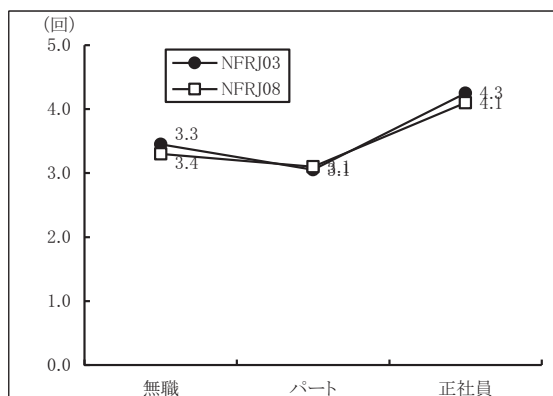
性別役割分業意識のカテゴリー別に世話の頻度をみると、性別役割分業意識が弱いカテゴリーの父親の場合、NFRJ98 と 03 よりも NFRJ08 の方が世話の頻度は高まっている。一方、性別役割分業意識が強いカテゴリーの父親においては、世話の頻度はむしろ低下している。一方、遊びについては、そのような変化傾向はみられない。

図2 父親の労働時間、母親の労働時間、性別役割分業意識別にみた父親の育児参加度（左
 図が遊び、右図が世話）

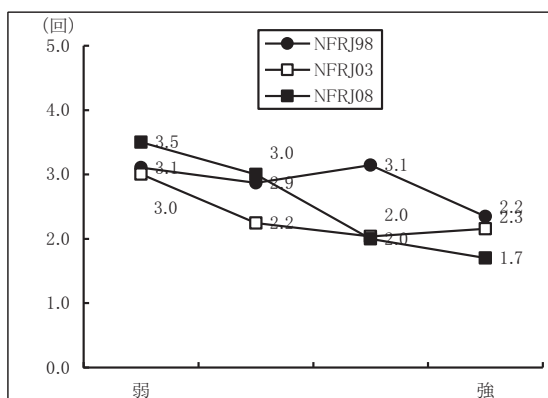
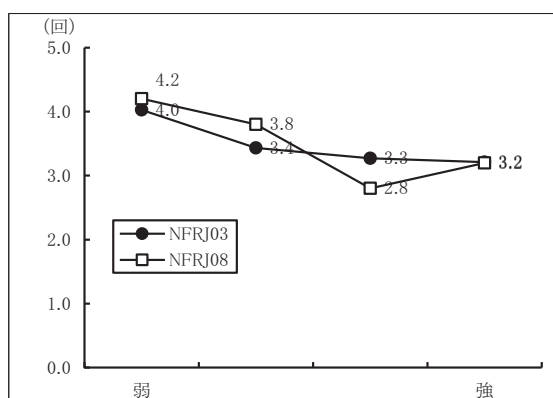
父親の労働時間



母親の就労形態



父親の性別役割分業意識



5. まとめ

本稿の分析結果をふまえると、父親の育児参加の変化について次の点を指摘することができる。

第一に、イクメンなどの話題はあるものの、近年、父親の育児参加の頻度は、増えてはいない。世話の頻度はNFRJ98では2.95回、NFRJ03では2.36回、NFRJ08では2.50回であり、遊びの頻度はNFRJ03では3.50回であるのに対して、NFRJ08では3.34回と微減である。これらを見る限り、少なくともこの10年間に父親の育児参加が増えたとはいえないようである。

なお、NFRJ98では「育児や孫・子どもの世話」、NFRJ03と08は「子どもの身の回りの世話」と「子どもと遊ぶこと」というように質問が変更されている。しかし、世話についてみると、質問上はNFRJ98もそれ以降も「世話」という表現で尋ねている。また、この間に、父親の労働時間は長くなるという変化が起きている。これをふまえると、父親が世話に関わる頻度は10年間で減った可能性もあるといえる。

第二に、父親の育児参加が増えない理由として、依然として父親の労働時間が長いことがある。父親の労働時間は、NFRJ98において10.8時間であったが、NFRJ03では11.6時間へと増加している。リーマンショック後の2009年1月に調査を行ったNFRJ08においても、父親の労働時間はほとんど短くなっていない。従来から欧米諸国よりも長時間労働であることがわが国の父親の育児参加の阻害要因になっている（松田 2008）ことは指摘されてきたが、今日においてもその様子にほとんど変化はない。

第三に、父親の育児参加が増えない理由として、近年ほど父親の性別役割分業意識と育児参加の関連が明瞭になってきていることがあげられる。NFRJ08では、父親の性別役割分業意識と育児参加の頻度の間には関係がみられなかった（永井 2004; 松田 2006）。しかし、NFRJ03、08について父親の性別役割分業意識と育児参加の頻度の2変量の分析をすると、性別役割分業意識の強い父親ほど育児参加の頻度が低いという関係がある。そして、性別役割分業意識は、NFRJ98からNFRJ03にかけて一旦弱まったが、NFRJ08では10年前と同水準まで戻っている。また、近年は、性別役割分業意識の弱い父親は子どもを世話する頻度が高まる傾向がある一方、性別役割分業意識の強い父親はその頻度が低下している。こうした背景により、性別役割分業意識からみても、父親の育児参加が増えることにつながっていないといえる。

【附記】

分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJ データアーカイブから〔日本家族社会学会全国家族調査（NFRJ）委員会が実施した「全国家族調査」（NFRJ98、NFRJ03）〕の個票データの提供を受けた。

【文献】

- 石井クンツ昌子, 2009, 「父親の役割と子育て—その現状と規定要因、家族への影響について」『季刊家計経済研究』 81: 16-23.
- 稲葉昭英, 1998, 「どんな男性が家事・育児をするのか? —— 社会階層と男性の家事・育児参加」渡辺秀樹・志田基与師編『社会階層と結婚・家族』(1995年SSM調査シリーズ15) 1995年SSM調査研究会, 1-42.
- 松田茂樹, 2002, 「父親の育児参加促進策の方向性」国立社会保障・人口問題研究所編『少子社会の子育て支援』東京大学出版会, 313-330.
- , 2004, 「男性の家事参加——家事参加を規定する要因」渡辺秀樹他編著『現代家族の構造と変容』東京大学出版会, 175-189.
- , 2005, 「男性の家事・育児参加と女性の就業促進」橋木俊詔編『現代女性の労働・結婚・子育て——少子化時代の女性活用政策』ミネルヴァ書房, 134-136.
- , 2006, 「近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化」『季刊家計経済研究』 71: 43-54.
- , 2008, 『何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房.
- 永井暁子, 2004, 「男性の育児参加」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査〔NFRJ98〕による計量分析』東京大学出版会, 190-200.
- 第一生命経済研究所, 2005, 『ライフデザイン白書 2006-07——景気回復がもたらしたライフデザインの変化』矢野恒太記念会.
- Nishioka, Hachiro, 1998, “Men’s Domestic Role and the Gender System: Determinants of Husband’s Household Labor in Japan,” 『人口問題研究』 54(3):56-71.

Transformation of father's participation in child rearing from NFRJ

Shigeki MATSUDA

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

The following finding was gotten as a result of analyzing the frequency of father's participation in child rearing and the change in the rule factor in the home with the preschool child by using three data of NFRJ98, 03, and 08.

First, neither frequency that father takes care of the child nor frequency in which it plays with the child have increased though [ikumen] gets into the news. There is even a possibility of decreasing.

Secondarily, it is given that father's working hour is still long as a reason why father's participation in child rearing doesn't increase. It increases to 11.6 hours in NFRJ03 though it was 10.8 hours in NFRJ98. It hardly shortens after Lehman shock. It has been pointed out that long working hours so far are the obstruction factors of the participation in child rearing of father in our country, and there is not most changes in the appearance today.

Thirdly, the father's gender role ideology and the relation of the participation in child rearing might become plain as a reason why father's participation in child rearing doesn't increase in recent years. It returns the same level as ten years ago in NFRJ08 though it became weak from NFRJ98 to NFRJ03 once. It doesn't connect with increasing of father's participation in child rearing in the gender role division consideration. Father's participation in child rearing has not increased for the influence of the gender role division consideration.

Key words and phrases: father, childcare, working hour, gender role division